

911.3

シ
義

四

季

物語

儀

乙年再版式

卷平



文極園授天於雅地冠雅人一弘藻潤之
和應雅之蘊於一柄傳於於九
弄自固一到承天一柄地一慕人於盡
每移盡破什二者文矣立章



集仙樓刊
月次三句合

王方齋

集仙樓刊

事の酒本きよ日月のまこと、御
むすをのあらひあもー掲ひる御
御の牌のーつきの日やとくらを
文政園品梅 紅葉 天徐来 地游心
楚南堂方無珠扇面引詩
萬千十つすうのあせ 一
あの毛やあくせいぬ 滅
次新の毛毛門田の日やあくは
誰もうちとどくうーうみの毛
御の毛うそちとどくうーうみの毛
みあ猿をうそちとどくうーうみの毛
猿へ下す御の毛を下掲ひる御
場やや海の考つは毛をうそちと
泉 指 舟 徐 游心 西湖
人林仙 あす あが あが あが あが あが あが あが あが あが

東坡集卷之三

七八月

卷之六〇上

火車言稿

卷之三

肉捲
仙薑助
味
卷
薑肉

卷之三

名士、廣信人。工行草，兼善楷書。其書筆勢雄強，筆意奔放，氣象雄偉，有魏晉風範。

移之行水橫之走雲
進之流之急之激
其之急之激之激
其之急之激之激
其之急之激之激
其之急之激之激

ヒンカ

東、內、外、批牛耕、柳生櫟、^和至府廳清空、年〇春柳像畫移
門、吉慶新肉、卷紀〇、^和辛酉過濟南縣、^和山東知山縣



葉固有矣。評正九月分五點以上

六
魚水
奇友女

外史人地天

卷之三

— 28 —
1
由了了

太ニテテ
日暮、
落田、
日暮、
アサ、
ムツミ、
トナガ
トナガ
アサキ
木特
木特
根引

蓬莱青李双壁立立方齐青蓬余素三二豆方布
雨至仙玉雀圆长崇宣乐八角八乐毛毛毛毛

萬井鳥之松文書於徐園中
譽不覺渴玉齋行歌而莫

本峰、
谷西、
平六、
芝三、
足下川、
山カタ
ミケヤ、
エタ
芝西、
ミスキ
モレク
キカシ
トサ

金平
六
早
食
食
ムニ
シ
金平
金平

二年一二月魚夏、第二松樹二月古東京奉書華年青、第三之
林路方水葉夏、里樹月山丸山金於山門若、安戶城主

卷之三

格二、矣三、二雀、三、双九、双双格治格而以格二、柳雀你井、^{ニテ}松
古門江折、宋家月夕^{柳柳}女女鱼乐、月股翠桂、高柳

山川の運りに平不思
ちうむく之生れ秋のまゝにや
かゆうりやあらそくを
華うみの小舟のりぬを小まく
あらすと遊のたるへ古すら
ふのよしむかうの十日は振
白きは湯らかふのうりう
月うえ又んぞまよのひ
あらす中野すすめの旅のそ
並のまゆ宿ありもすり
風うけのうりう學の内
タ富山みみうちの林のた
車せゆきすくまきの中の
れをや市とてのくのくのく
二つ子とてのくのくのくの
白いや門とてのくのくの上
林のそく一まいぬるの
月の居とてのくのくのくの
茅と白いとてのくのくの
枝とせかくのくのくの
ちうのくのくのくのくの
代行とせかくのくのくの
あまくとてのくのくのくの
申すの事とてのくのくの
一画とてのくのくのくの
山川アリとてのくのくの
風くのくのくのくのくの
代行とてのくのくのくの
申すにゆくのくのくの

トサ 沖山 おきやま

二，魯林、松木，口、三，巴文，巴文，麻，三，有，松，立，木，桂，有，松，紅
多，學，徐，松，木，鳳，松，松，木，屏，裏，宗，自，深，開，合，面，系

おもむすやうしてうつり
ゆき残るあすかあ初くれ
強説のうう言ひよしと不様
力え第もよ第もよやうての多
さぬくようりのあらがせぐ
丁は風呂をもと舟の流
傍る川をみてゐての多
秋のあざのをうきのうづく
ともくよかく夜のやくよ
草木や小鳥をよきめにゆく
高い柳のまじり枝のま
さううきえまぢかうづく
ちやねてあふかあふるあふ
布まじけ河のいふ葉りもち
物のまじめに年ふるふる
テテと落すかむし山の森
のまじめに落すかまき瓶刀を
紅葉のある森ふくら
ゆけぬうづくよし新の為
ゆづけの松まつすけ月夜
あくまくゆくやゆく
全文字

九峰山二妙關關立室
烏系里繡鵝曉天之
三二孩三妙、覽石二矣有里繡、山樹叶風
望山參生二跡生熟、惟矣系繡

枯葉子波加山風至秋

ハラカニ

ノコニラレ
アキラケ
アキラケ
アキラケ

舟板の如キ丁寧に塗る
身牌は後之鐘眼
萬葉の壳粉を撒く
日暮の月影
路等も古き如き
思はや神移は也
根高りとて木等跡
根生る人の事
牡丹の如
花の如く是れ根の也
此あれや根の事
根草八重の如
雪板出る事葉の柄
喜びや根の事
根草八重の如
深海の法被の如
其御鏡中御縁草の葉
若峰の水性の如
呂拂の如きの如
威勢の如きを擲て
其御鏡は御高比
余れの如きの如
道の如きの如

あらゆる急務の者や事、一々書く
却てうり、餘もうとくはあまうる事
山荷や火籠、通等々ハ、唐國
本邦へある様少しあるが、
萬葉集

ウキノレ
タハラレ
サルエ
マツカセレ
マツサクラ
アサイイ
カナヌイシレ
アサヒ
カニコ
アサヒ
カニコ
アサヒ
カニコ

書の事も讀んで居ます

卷之三

室中や調子で鳴る。或は矢張りの事か
屋の雪や葉作れてはあり
若狭や岐阜それ一寺に山
地山や赤松翠柏等を喜む
所本つゝもやおもての壁
等の事は机の上に置かれる事
能く手控の間の菌や
仕事日よくよどみ跡と跡
等の處りの腰帶等また手
は菊や梅の花形や秋の夕
う冬の花の持り方の月
をさす刺根り九合やほりテ
丁の木芦の花の名の句
を織りせりと云ふ。晴りあ
れ色の木以てはあります
新芽や春の木なり

南都大
乙巳年
二章子席一福喜秀花、書、卷之三
七八場人場喜在東在夕川山母

病氣より癆し御り申す丁也甚
初より既古より疾氣申す是也旁
密れ者也久々申す經度もくゆ
欲傳ハ傳され推至多也御傳
了極故工也れ色之くの極度もく
着の三重也密傳ノ事也御傳也此
擴張也申れ也扩也擴長也
更科の事也申れ也扩也擴長也
收度也縮率也扩也擴長也
協和也此世の病氣也收也
絶の仲下秋のり氣を既の了く

ハラカラレ

萬葉集卷之三
歌四百首
歌之三
歌之四
歌之五
歌之六
歌之七
歌之八
歌之九
歌之十
歌之十一
歌之十二
歌之十三
歌之十四
歌之十五
歌之十六
歌之十七
歌之十八
歌之十九
歌之二十
歌之二十一
歌之二十二
歌之二十三
歌之二十四
歌之二十五
歌之二十六
歌之二十七
歌之二十八
歌之二十九
歌之三十
歌之三十一
歌之三十二
歌之三十三
歌之三十四
歌之三十五
歌之三十六
歌之三十七
歌之三十八
歌之三十九
歌之四十
歌之四十一
歌之四十二
歌之四十三
歌之四十四
歌之四十五
歌之四十六
歌之四十七
歌之四十八
歌之四十九
歌之五十
歌之五十一
歌之五十二
歌之五十三
歌之五十四
歌之五十五
歌之五十六
歌之五十七
歌之五十八
歌之五十九
歌之六十
歌之六十一
歌之六十二
歌之六十三
歌之六十四
歌之六十五
歌之六十六
歌之六十七
歌之六十八
歌之六十九
歌之七十
歌之七十一
歌之七十二
歌之七十三
歌之七十四
歌之七十五
歌之七十六
歌之七十七
歌之七十八
歌之七十九
歌之八十
歌之八十一
歌之八十二
歌之八十三
歌之八十四
歌之八十五
歌之八十六
歌之八十七
歌之八十八
歌之八十九
歌之九十
歌之九十一
歌之九十二
歌之九十三
歌之九十四
歌之九十五
歌之九十六
歌之九十七
歌之九十八
歌之九十九
歌之一百

タハラレ
カニキ
タマコ
カニキ
タマコ

天夢口 地苦山人竹二

雨露集

夢告
口山

樂譜

蜀道

生

事の音

魏旋子

轆とひよ拂
ちに花此江戸

備え

笠因

判来

甲賀松井謡森

年々一
件は経や
至方の日
如萍

度處がハ體立度内
紅の吹年が後詠者
月立の本體 七八有分

南
呻吟

天
モ吉風立也 大五
人六五
心因人

佐ノ口

み

笠因

秋吉

松井

又吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

山

御

季

秋

吉

</

辭、辭、辭、辭、辭、辭、辭

金子
さよきすくらべらむすめのう クマモトレミ月
色のうらがゆれを年若うり 百年ハシモ
草木に想ひゆふ事多きし物語
歌あらや菊の天孫の母は痛
實のあら蔓草の多き林の様 ウロコレ
岸一水田毎工窟ばかり 全七節
久松早苗
あれ而と外度身代也無福時 ハラカラレ
毒子
玄

天六口
被肩
地七口
重裯
人六〇五
每之浦

の事はアリ。身を轉り立てば
影を失ひやうへど、白土は皆生善
ニサヘテ、事の如きをアゲテ御前
事の事、其の如きを失ひ難く、書の廉
是え了以和也相也、想の零
松川や御令の経の大變れ等
う人の事や女をひそむ事の間
をもくろう事二五年山の乞
好の色を失ふ事も少く、男の如

雪月角鳥澗
春夢碎處
靜山
靜海

蘇東坡題跋米芾書卷後

（略）

クマモトレ
季月

サルモントラルサルモントラル

金橘樹幹、荔枝、李、梅、杏、海汀、一周、李、柿、布、柳、
圓、花、樹、圓、角、角、李、桂、細、圓、枝、日、滿、瘦、朱、紫

臣等より事のつゝ 雄の留
ちづや留ふ耳をす 両都
秀色
臣等より先づ一中
日休め 両の下
御子申名りて観の是様子
家を押え京の葉落
田の葉落つて志高や留通
花落や身よれども未の留
御留のうねりゆり中を留子
高ハ留くう44へ戻り
都上院の二室や高く挂け
御室の日本休め 小款詔
御手数難難や秋の而
嘆か共に御事の事と申
れり先づハ後高古アホ
文母や度アホ小網
先整ハ塔サテ高て塔アホ
草木ハ菊と申すル主アホ
草木アホ

タカハシ

華、笠柳深、至夏、葵花、尚未吐、在山
周月川口山園、立魏以培養、其葉

寒夜初晴時、橫
雨晴在廬山

新井柳風の筆で、歌の解説が記載された手稿。歌題は「花の舞」。歌詞は「天一地二人以降」。歌の解説では、歌の構造や音韻、意味などについて詳しく述べられており、その中で「花の舞」の特徴として、歌の構成要素である「天」「一」「地」「二」「人」「以降」が挙げられている。

朱子語類

卷中七事の歌
んたまうゆを説

美和原に在る事の間年、春の風に
吹き拂はれて、花の香りを嗅ぎ、
草の音を聴き、鳥の聲を聞かず
して、心の餘りをもて、身の外の事
を思ふ。身の内に於ては、心の餘り
をもて、身の外の事に心を向ける。
身の内に於ては、心の餘りをもて、
身の外の事に心を向ける。

和
東翁
下サテル
ハシ

李章炳炳斗炳、桂丹亭炳秉達齊体、霍震洪東初冷素鴻琴擣棋
石如杜門秋毫、王正峯毛游毛高乐、黎承恩蘇秦國教蘇松庵魯

あれ事の間、元よりとある
名月や柳の葉のうもめよまゆる
海比くわどちるはのゆひをあ
御宇に先づて林乃のうるべ
秀乃海き船や生桂乃はあた
弓弓にて月を結れつやくを
本比上乃處をてトロねむと
ちゑうとてけり幸て蘭猪
水玉妻はつき因の店ノ有
猪比種を依生魚の内見る處
すみ私ノ神の如きをくわくわ
一抱持くと端を海くね月のそ
一抱た戸や幕をアケモ戸の内
特化能を由くと重ねるが起
御城の本とて居や東さん不
り若木や川乃向かふ所の内
約さまと魚工のきすを算す
博やゆのあくつうこほす小石を
タクルハ老族のうえや海の居
海山へ御くわ角力を競くわ
而シキサムリテこれリクらのす危
古壁「ハズメ」月又北備へ持
船又舟くわろきのゆる桂星六
翁や石川本くわ」森のゆみ

シスシレ
仁、
ス春繁
サクラレ
未ヒロレ
チトセレ
ハクロ丁
ルレ
タワラレ
キハ
月ミレ
アザクサ
玉トレ
東翁レ

秋、巧奪天工、雙魚共底文、如意一橫的橫抱局、橫抱局、
君、方勝局、蝴蝶月桂向梅的、交玉璧川亦乐之久、月不墮月樓

古事記傳
卷之三
金の本よりちうひをきむる柳の
いふ書下さり徳を争ひ田名
石音鳥唱や祇主を勝し御の玉
御鳥名社乃振りを松子とぞ
猪月の弓矢や矢鐵す太刀
潔奴本比乃と勝し社の松
を守れとぞ皆一ツ森乃破り左
大鳥の巣に落りて更に上
御子而え丹の葉に奇一升の茎
升をくそて御子し松入門
彦の木根の茎をくそて二の月
滿(まつ)かくくら(くら)をそく(そく)に
月比妙(めう)月の月一本の木に
不(ふ)立(た)て咲(さ)く月立(たて)場(ば)を
萬(まん)秀(しゆ)十三号
物相(あざな)は育(いく)て互(ほか)りと居
連(つづ)けを並(なが)め取(と)り合(あ)わせ
居(ゐ)て粟(あわ)を下(お)せる種(たね)が
入(い)て成(な)る所(ところ)やリの日
足(あし)の肉(にく)を食(く)る牡(ぼく)母(め)
本(もと)を裂(さ)く力(ちから)一(ひとつ)の隊(たい)
を至(いた)るや都(みやこ)平(ひら)とたのうと
侍(し)の行(い)きとれどもそ鳥(とり)

ニノハシ テウシ テロレ 東省レ

竹石

サノ上和ノサ
東ヨレ
サクナレ
タクナミ
ヨシヤカミ
東翁レ

柳柳輝株松半英
柳柳輝株松半英
垂垂暮曉松休遠
垂垂暮曉松休遠
柳柳輝株松半英
柳柳輝株松半英
垂垂暮曉松休遠
垂垂暮曉松休遠

卷之三

五 玉 兄在二柳斜倚休閑一柳旭羣霍夾鶴柳
川內如來月高氣蕭寥空翠猶突首秋林

秀忠もや端山よひき月の夜
戸一枚古子がりくとまつり因
秀重や博のめきそに烟の景
再考十手のア

年，生了病

總之
再考據

上諭

卷之二

卷之三

宋
杜

旭老君推雨驚飛鶯
水西山樊樞書

、 善 一 六 上 七 里
花素也病頤弱為柳霍復竹光昇成
月教矣凡雅夕の草

十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

東翁連月並句鏡

行竹窻窗半舍

勸竹營寧古閣西
進竹席高半粧

七
行故弟斜梅頰一春風
雨隨西月濱友笑
門寸寸寸寸

七言詩
同參菊會
壬子年九月
吳昌碩書

、
東山風森東來麥李修多柳松柏柏
能儀日

旭東巴渠
嘉永丙午年九月七日昇菴
竹隱齋疏

行誥直諭

夢中七郎のア

徐格初正李琴、夷秀、雀蘋、春清、景秀正、并麥風東并
林秀施砍东系、缺高、蟹山、雅聚儀月松月菊來

房の事や身の事の如く方物の
月と雪とありとてよく仕度す
を尋ねてゆくもあらず月の隈
宵れども種々とてかゝる様に
嘆かず嘆乃足也むと謂ふ事
持候や居候事年々持重す
外は嫁やつゝ子むら和儀
うれし日はのうれし日と繋りぬれば乗
根事年々年々の事はよろ
の月や盈月やうへて四つ更生
一羽鳴るみぞと至極の事
川筋や筋とさす日のそぞれ込
秋乃てふ中をかゝづけり
因小立ね房のエヌセホシ有
戸口を出でて見ゆるや様の事は
僅切く板門をひきこみてほきの事
思ひ出でる縁のまことに
草薙猪や猪や猪や猪や
の事はまことに時有りて
激わめや所縁のく事と叫ゆ
未だ余所に思ひや様の事
無くして中ことこの事と云は
事は既ておとづれ一様に
面をせばつて拂つて拂つて
おとづれの事ある事は井戸
裏庭のタヨ古木中かと似て

赤ヒロレ サクラレ チヨタレ ハキハ
赤ヒロレ カツシカ タワラレ
シハヰ丁 玉トレ ヒサコレ
カスカヘ 本翁レ

呈宋宋汀慈山任魯巴之拂面柳、旭立堂受拂為旭苦、折顧、三、拂
月而歲晚風葉落於由鶴嘗而承。乞玉幸重月夕案左 川友 巴 在

草木や松のやどかの葉桂い
色をさうい本音を松木を
煙色さう松をあくへのほくな
てすみすみ葉とし松とおち
揮炳といふ猶不めくはるにが
巣林はまよひとほりのあらと
花有りや旅のゆくよ寒のいと
宿拂ひ氣歩うとくれ秋乃行
と星のくすむ夜風を
猪時や拂ひ小垣むらの夜を
秀志みとくちくくぬくよし春
木犀比うりて故ねくれを荒
根海くゝ風もさゝれ新のむき
草木や星のくすむ芝乃上
志をよぶ夜更や月の夜
拂乃えねゆとゆり
秀ゆく葉乃小村のゆけの止やたる者
友を水乃アて拂満に拂比彦
拂やあよりため月乃もる
房ゆき拂乃も月の併く春
乃井の月を拂く度お比彦
再考十亭のア

、、伯、、、正タレテ川

花被休秀、花被休休被柳耀二葉被串斜、夜、休、柳
月度月 月度月的尼被光深來罷故廢被因 肉 級

希臘詩集

山里や歸りておもむきを起す
足とひきを別も爲す餘のくれ
義士のるる足と手と頭
居あくや月のきよ西の面
てふ一日あくちうそくの上
かまくらのふへそり身を置くる
御のすね奴とうぐい
移住の事
草山や葉の匂の仕乃とが
移住の始點を以て至くは需
山山や晚猶下を乞田を仕
育自の申し候くに賜の了承
お出く乃見えの御おう御する
居るるのんとぞくや月比雪
をすくふ水と雪や小夜能
夕ときす上を而少るのみ其能
能ややともそればかりの古
原ちくわ別くも旅、船にて
舟を芦の枝際の義士の
舟を考す了
もあく、義士の舟、丁度
いれども當もやくの月

キトセレ
マル山
元翁レ
サリラレ
ニノハシ
ハクロ丁
ハクロ丁
タクナ
アサカサ
タカラ
东翁レ
未ヒロレ

并作、斜字仍放双巴音东兔猪为害
系登月时故障蒙风而版王以归之至
并立女突厥

考へや七原のア
酒ア小野星三乃乃吸一
多らうのアリノ熱の扇を角
底アシセアハ熱氣乃等ア
松浦をミカの岩合や若のア
考へやアヒト翁よ大の言を多々

卷之二

素房扇作九
教松风爽

卷之三

本
東省

竹林寺耀植孫綽傳春山參患双目苦病持拂拂捨拂拂零一辭棄崔休善
弟史惠惠家廢舍因西肉君而為墓月左川辰月川二丙辰系癸巳山聖子

面を拾用筆毛で下毛比序
酒居工事の序の序の序の序
書や松のひきの墨もみち
残月やとねけく見る井の序
石走るよと勝手井乃木の序
一本乃木小引や引手乃木の序
東括や引手へ走り井然めくね
物乃木引手の井人致り當て
おとづれとて表乃木れう音の爲
裏表とねひ手とあくびれ樹の後
草字葉の後乃木とがて
田と峰やつる事あえて松へ登
草筋持や歩けあくとも國の都大
有芦をへたてて秀の物をり
はまむかの邊ゆき船や餘りを
院在子石とかくと一櫻出し
魚白や白塔とよき井乃木
や竹の氣と氣と御、まつ並や松の葉
麻衣や扇とかくと一櫻出
本原の家を定めあき匂ひを初
初了魚乃肉とおもててすまほ

二宋宋、嘉祐作李拂菻。宋旭子之。拂菻松葉正雀拂正
拂菻。內無外拂菻。審朱毫。良枝友。亦雅優繁多歟。
吉宗立
右月立

晏居多深
天德至
再考之終

人顧友

東翁連月並句鏡

行竹陰窻半舍
司竹醉舍半明

勸竹林客盡開西進
竹席未半狂元竹

林陰先生刻

東山天子の教

御名を下すにあつて、其の事は、

下サテ
、ハ木
チトセレ
ニツト

一柳尾

樂府

三

ハ木トセレノツメサテモハ木トセレノツメ
東翁スンフ、ホヒロレ

柳琴南、霍体若、莫庚鹤、孙凤滋、清秀、董奕、薛素林、一桥兄
川东桂、樊乐珍、麻庭松、高凤英、可多、水翠、雅山六秀得翠翠川

卷之二

三宋幼双双作知品本擇芥文、拾芥云虛擇乃擇者服儀也。零落就緜
出歲暮葉家人失好玉制月桂朝。德聚東宮月不擇然。其處矣三交五至落否四

城内には金城町、小幡東
条川の北にあつて御薙の声
をうるはせん。千石植乃山を
ある。御主乃鳥やゑと無事
タリハスノトモレニ三十石
富士川の河岸場を抜て御名
きく。御子の吹屋守し守の御
物を被り奉年余を経て御連
承乃由や御子を以て御のむと
移りてやね千の烟乃深手れ
抜拂や足手拂いし草乃上
絆の寄れ脚を抜拂ひて弓
矢川をとどける夜免松比喩

下サニ川
ヘ木

柳南齋著素齋詩集一編
川桂堂印於嘉慶丙午年夏月

林穉金先生集

十月也松を移す
木立に植へ
落葉を下す
軽く秋の風に吹き去る
かくも高くて香りやかな木立
かねの木と並ぶ木の枝葉は
ともう少し遅く年暮れの紅葉が
山を染め下したを惜し本懐の筆
墨も身や茶席上に千枝圍まれ
寂れどもあり嘆かず
吹ふて音小多乃山乃月
星もかゝらずの月夜にし霜月は家
鴨もくや春も葉も旅人等の如き
ね延く惟よ志方月和之
再考十六序
海氣と第十九章の事叶ふ

ニツメ ワカハレ カスカヘ ザタクララレ 下サメ

梅 双汀亭寒香柳林翠竹屋宇半茅
二 柳壁石栏而川庭青色月光微

南嶺委涼那輝柳葉花
林葉多翠葉花葉全綻

、升拉宋松 楠松 疏半离案、猩枝素、二经
系以拖山 宵月 内秀拉弓 鬼柳柳 也

抜筋や承乃瓶すゆの酒
万代芦の瓶すゆの酒
津の手の瓶すゆの酒

祖廟忌席之魚歌
升陔直指

寄地甲傳

卷之三

萬乃子ノ如くや阿多のノ見
かねの事ニ年才重乃事ノアハ
此伐草ノ取ハ難キノアハ面
筋合之を亦此ハタの辛子財為
用ノ子の事る所と立あ事ノ有
ナニハ候アリ也拘も大木
絞く事ノレ年才初ノハル
初盡セテ皆ト甚接ト一トド
事事乃極はくうしや御比當ち
名掛ト其みの取れ物トクル
義歎へ客走すや居乃妻
子ノレノリ引く事アリ大根名
物アリ夫ト一走ルや本の裏
勝寒北上事ニ皆ハ芦若之
強ア小男アホモク九月之
カニシシ候の事ニ也構四ア

アル山

七
魯
統
考

名棋局二、布魯尼奇通盤皆靜氣
的山雲擇水素底急進工玉乃六個

水木の事方森川やうねおる
源也や松ちくいの？竹久至ら
川にてよ月を宣合す。一山れば
ましに氣内ひる木の御月の裏
お堂や廿九乃月を見たる
松切く菜木柳ゆき小走りを
ゆくと皆山内えと樹の竹
枝桺や炭ねける近車乃先
ツね延びたる月を不日承が
御川そと樹を參る柳多
新よ毛色月うけ室に岩花葉
度3月のひよ移りやちる赤帝
若舟乃爛りハ神多みを
紫葉はよる節の時あが
柔葉を鍋の光や布の美
ゆく葉と換りのがる子菜が
ゆくと柳うぐいや小六月
毎ヒク春かうと海の根乃宣
裏北ノね衣の生え根て之り
至くおこ延天下下そ流葉が
吹風くわぬ波曳く金のてゑ
ゆく折立をみる年く葉落
参考十序ワア

梅葉房和叔
多酒渴無聲

宋二体松素柳在宋释 宋双矣双知假莫巴妙如第三柳
柳 素月嫌莫内易鬼 岩室門柳从白柳性莫交西巴川

伸 拠て度ふ取る桂川名
かれ高やとす守り也園にし
葦やうれい生る處北約兩
河岸芦北生る此ノイハ改
拂く今や跡走はし處の多
面止め水をき門やかれ尾起
可此中や山内橋手を尋一日
多ひ木下枝の有る草が多

宇治川
宇治川
宇治川
宇治川
宇治川
宇治川
宇治川
宇治川
宇治川
宇治川

文書

多おとと秀才 伊水名乃川

根有風アモシキアリ 萩當

河多アモシキ拂れアリ
木多アモシキ

勅

玉金也日向へ
も命し所多の猿

東海昂アリテ
アリテ

あまくわアリ渡也
木と夕暮れ色

月寄

月寄

半哨

半哨

半哨

半哨

月寄

月寄

半哨

半哨

去朝房請以爲精淺重 廉玉素精 諸生原知佳空字森羨雲井西
月英名傳易居堂 岳 九泉清坐 等 伸遠席 美中宣簡宗

東坡全集

柳の葉の吹き落す
風の匂いをもて
春の香りをもて
花の香りをもて
草の香りをもて
木の香りをもて
水の香りをもて
火の香りをもて
土の香りをもて
空の香りをもて
月の香りをもて
星の香りをもて
太陽の香りをもて
雲の香りをもて
雨の香りをもて
雪の香りをもて
風の香りをもて
火の香りをもて
水の香りをもて
木の香りをもて
草の香りをもて
花の香りをもて
人間の香りをもて
鳥の香りをもて
虫の香りをもて
魚の香りをもて
山の香りをもて
川の香りをもて
海の香りをもて
田舎の香りをもて
都の香りをもて
城の香りをもて
村の香りをもて
町の香りをもて
市街の香りをもて
山の香りをもて
水の香りをもて
木の香りをもて
草の香りをもて
花の香りをもて
人間の香りをもて
鳥の香りをもて
虫の香りをもて
魚の香りをもて
山の香りをもて
川の香りをもて
海の香りをもて
田舎の香りをもて
都の香りをもて
城の香りをもて
村の香りをもて
町の香りをもて
市街の香りをもて

柳の葉の吹き落す
風の匂いをもて
春の香りをもて
花の香りをもて
草の香りをもて
木の香りをもて
水の香りをもて
火の香りをもて
土の香りをもて
空の香りをもて
月の香りをもて
星の香りをもて
太陽の香りをもて
雲の香りをもて
雨の香りをもて
雪の香りをもて
風の香りをもて
火の香りをもて
水の香りをもて
木の香りをもて
草の香りをもて
花の香りをもて
人間の香りをもて
鳥の香りをもて
虫の香りをもて
魚の香りをもて
山の香りをもて
川の香りをもて
海の香りをもて
田舎の香りをもて
都の香りをもて
城の香りをもて
村の香りをもて
町の香りをもて
市街の香りをもて

川经、小穿新信第一四粒花院充善、宝、一麦粒粒双生降古楼抄关漏电市沟和
移
口
园而 多朴因因人洛康吉因支院 洪 德景固移石多竟林因因是古因因

山勢高峻，一望無窮。松柏參天，氣節森森。

松柏之無終歲、桑梓之無終年。故知孝子之無終年也。故知孝子之無終年也。故知孝子之無終年也。

昌黎也甚好。去拜望先生，先生在叶叶齋。及至五洋亭，見先生已歸。先生之子承志，年三十，貌如其父。問之，知其子也。承志請入，見其家甚富，有書畫、古董、金玉等物。承志請入，見其家甚富，有書畫、古董、金玉等物。承志請入，見其家甚富，有書畫、古董、金玉等物。

中作多絕句至公量為曉雪白雨來引弦酒泉界於松山清高處於崇山自秦岭山出

御名の事等は勿論) 様子も告中
まことに此の如くアリ。丁の事も又アリ
トキシテ御代りの如きの取扱いも甲
トアリヤうりの如きの落札もアリ
事の如きは勿論アリ。考究事
アリ。又アリ。考究事
アリ。

予嘗至嘉善縣川口村石竹村北山中，見一株老梅，根幹千
歲，月二、三時方發葉，自秋徂冬，葉落全無，因號之曰寒不
老。其人自號

林古蜀一春游嘉陵江一游折石街和望里王孙东一双归船去平桥被流之水五
自归故园攀乐因长因院房转室不因少院深月水多景尊可山行九二岁寒麻得

金在弓首 弓首弓形布北、双
久 东山面 背西山形布弓 稽
孤山且系耕 穷愁布置井一个
高松水云外 泉声弓形桂可松而山面高突

大中之年以詩名

吉戸川白雲寺月光寺

九月十九日数々高年

登臨居樂序

天十五

魯水

地吹

搗譽

人吉

熱流

若木

吉輔助

吉経

搗咬

吉経

双葉

再考十節

おまきは紅葉のや深の多喜連、
吉川の波つゝもくもく花
移すくやるくやるたむの振
拂ひく拂拂り林とやうり毛ヒサク、
文科や田毎の林と月と子、
草木と木の林と月と月と毛
萬にまくまくの木と林の月と毛
あるこの秋の月の夢とむれ縛り三葉、
せきあ一叶の拂ふ毛の候
伐遷す桂の聲と初仰毛道中
毛毛毛や毛毛毛の山と
月のか月の情毛毛毛毛毛

茂る乃萬の彦毛の毛と毛と
ねの下と毛と月と毛と毛と
長お處や細き毛の歲の毛
秋風や拂とほくと松の毛、

毛毛毛毛の影り九月ナ

復蒙居樂序

天十五

吉経

地吹

搗譽

人吉

万新

吉木

吉朝

吉吹

吉経

吉輔助

吉経

再考十節

枝なりのーと毛と毛と毛と毛
枝なりのかみもくもくと毛と部が
青月よりしきと葉と葉と葉と葉と
いのちの月夜と夢と毛と毛と
事だらけとさむれと枝の毛へが
ゆの毛の毛と毛と毛と毛と毛と
ゆの毛の毛と毛と毛と毛と毛と

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

大傳馬寶田社

月次句合



國學圖書館

卷之三

英
廿
卷之六

卷之三

地士高生石
一尋秋
立

人志、猶松
吉之
吉母
吉生
吉峰
吉石

之蒙羞、一至露臺時東籬里陳夢嘉
徐孺子 楚中志可移而不可遺也

六、步、庚、未、初、正月一立春，要以立拂櫻，如拂櫻里素朴微
揚，遇秋，松柏有寒云降，至是也。此家多拂櫻，故名。

金根曾の急つき手事の戻り
一本、うつまちが多事の榮り
うす御と里も近寄りて事務
甚のふれつゝとある。唐へうえ
嘗湯あやめのまことに、すみ香
船の方面の事務と税と手事と
様事や事とある。」
是を手の似合ひやう結、弊男
佛事や修竹あきはれの事
川間あそよくとある故に、
文教や事務あくまでも有
次第で倍へ事は競る。
隣子や、誰もがれとうら
うのうの教事小あるは舟の橋
様をかく事と手事と手事と
えの乗かる事のよろしく
かと船と板屋船と、きほりや
用のうちのうち、おこなひ
本居と源と、其の仲の物と手
傳と手事と、そつねの船
事考。

2、^原東唐去函○^原隸一里希^原孫桂星一里希
柱人蔭山女九月^原紫秋舍事^原有^原色若雲^原樓

桂林彙考系譜

庚戌仲夏
海考
地十九
萬國人
李文林

之實也。此中也。若祥氣不當其體。
神轉而字絕。中之相守。虛一往以觀之。無一失。無一漏。無一虛。無一盈。
偶有存乎於中者。亦可謂之。陳
平都也。徐陵子是矣。序。勿失。勿失。
夕。立。勿。失。勿。失。勿。失。勿。失。勿。失。
猶。多。之。方。傳。也。

樓右樓餘勞揮

天高高海東地土山人
天高高海東地土山人

南嶺
支山房

卷之二
重刊
新編
卷之二

拾食
性
物

田林圖

題

山中之物

卷之二

卷之二

卷之二

卷之二

卷之二



劉家客書
無二月六

文
章
卷
之
三

赤
白
黑
朱
黃
丹
青
綠

鴻臚
山林
系

十九、ヨリ
十七、タマテ

人主
卷之三

卷之三

五

卷之三

卷之三

十九、ヨリ
十七、タマテ

考文書卷之三

タハテ
タカチ
サクラ

夕齋拾

1

与梅产者立东东柳山山源深七梅四之二为山東
角夕山晚春月接春 梅安 日 夕齋梅

若木葉の向うで山を越す
月夜の裏手に黒子が立つ
と秋の風物づかひ秋の月
君の左手に君も歸りて山の下
雪と紅葉が共に大陸へ山の西に
跡を残す君を送るの夕

ハヌカフ
上サコ

卷之三

浦 布局

卷之三

集山樓

大連市地圖
本圖範圍
北起海濱
南至長春
東到黑龍江
西止于嫩江
本圖範圍
北起海濱
南至長春
東到黑龍江
西止于嫩江

集仙樓譜

九肉

卷六

卷之三

精評
一清醉
地七五六等
九月
辨白
東方
中止
葉
米
朱

六
十九
ナニヤテ

卷之三

孝子傳
卷之三

東方朔之巴辭
失毛立除謫

2

此書
卷之三

人
口
六
三

卷之三

卷二

根葉 巴沙 茅の助
高麗子亭

卷之三

卷之二

四
ナニヨリ

本の日と相手延年一
此の日と相手年少一
一月山

ハシス、
ナガラ、

本の日と相手延年一
此の日と相手年少一
一月山

ハシス、
ナガラ、

物語五部書
新古今物語
新古今物語
新古今物語

ハシス、
ナガラ、

幕内 漢詩 楊柳 天氣 時器 人

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

本の日と相手延年一
此の日と相手年少一
一月山

ハシス、
ナガラ、

角川

ハシス、
ナガラ、

本の日と相手延年一
此の日と相手年少一
一月山

ハシス、
ナガラ、

天皇 梅月 地主 故我人

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

外

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

生年 五点ノア

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

暮の雨始りあらえ
春の草種

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

福はれいとくとく
春の草種

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

暮の雨始りあらえ
春の草種

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

新古今物語
新古今物語
新古今物語
新古今物語
新古今物語
新古今物語

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

新古今物語
新古今物語
新古今物語
新古今物語
新古今物語
新古今物語

巴波
巴波
巴波
巴波
巴波
巴波

可

新嘉坡空運公司
英美商埠專賣
之 備

茶
件

新嘉坡空運公司
英美商埠專賣
之 備

迴文

新嘉坡空運公司
英美商埠專賣
之 備

晴天也晴了也晴了也晴了也

晴天也晴了也晴了也晴了也

九

是年正月新舊之月

庚午

九

水季有草生川幅、

庚午

九

寒舍辭

天中二
天盡立

風期

地立

人

水

人

善

節

人

善

節

人

善

節

人

善

節

人

風文移

移風向

馬高

在望月

望月望之

高

風文移

移風向

馬高

在望月

望月望之

高

嘉永六年

一卷一會甚迺向合



輝

七

德秀

人主五六位

本審一
次宣柳政補
苗圃外事局

卷之三

升
子

卷之三

秦漢劉虎

志林總歸：杜家寒多紀惟內次、李家佳佳薰香美繡移之東、云海美以始
西山重本、崔集、^今和蘇世金邑、累休云雲拂蓋於亭而已。曉幕者、首

蒲子年々彦ノトモニシテ密ノ内
高志の言ハシムリニシテアリテバ
玄令一ト能ニ無事の御之五ト
争ニ付リテ在当承拂うトモ
吾名

十二

李香林
張月亭

手標示の如きを廣くお見ゆ。又
至るや頃寒温甚ひの春忙
極も入春の際よりやまく、蓋
朱の陰子様小字にて書多々
之に、之は然るに不動の如
未吉、

字號八七
——書之
——

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

寒柳

卷之三

行在御書院

卷之三

سی و سه

川太神宮掛額月次三句合

桂山翁

卷之三

不
うれでゆきよみねあく浦の月

そんきいよ終て通考) 秋の木
日の朝の風をもるみうち

蓬のものにまことに年
彦星とてもうべく影を引

御前で整の御用を仰がれ、お手に持つておられた御物

黃昏夕日生紅暉，萬物皆秋盡。

船を廻して山の鷺をうめまつゝ、結び
亦其のちの事で内に達し哉

中興之時，

二二日つゝ、暮さりきのう、チトセ
女を賣ふるまくあらわし

住翠宮戸川太神宮掛額月次三令金

卷之七

つるみあむつる枝もあると秋の樹
あれでかうやくおれあく浦の月
そんまくよ泊てゑうす秋の月
日の暮の暮にてきあるひみち外
陸のまどりあゆうて年一聖なるト
彦早とやまくす一木よ影を引
豫寂て聖のゆくらるぬ月ト 忍川某
鉢うけやともひくらるる月の高 キク口山
森のすくわてつむがむ松葉外
黄の草すすむかすあは居とも秋
登日中月もるる井の工船 外
船船て山の鶴もすあはまく 一 終ヶ谷
御生のくちのまくあはる月のまく 我ノ
もくうよりくと歌をよみく
白糸やまたうれのうくと音をみる
二二日つむ一 姿さりこくねてう チヤレ
送火を度すまくまくあはうす
巴月 蒼雲 梅松木精 一 岱 一
蒸 宮復安 雄之雄

卷之二

葛茂庵澤我斧

萬葉の文部も嘗てありひま
清厚よりて實のある也火打
貴次の筆を御す内記
萬葉を嘗てはすとて嘗て
今あるのうへとまれて秋の風
あさうりや静かに秋意の生すを
像する所もとて秋の風

五一月枕一岱 1文 1 束
后聖光之溪李 烹 13

急月
梅枝雀宿梧柳女我柳女梅不獨女
月春驚女九月女女女女女女女女

卷之七

朱明居后 柳五 一 宋
柳五 一 宋 朱明居后

萬國慶
聖朝萬國慶

落葉の日をあつたと見て秋の夕
桔梗く寂絶御うらうと
枝のうへりれりまく
月あつてねほよやくもあまく
八月ア色むかづくまきれ
桜の葉も衰へ度々温らう
ゆう灯す枝原るあれハ霜の夜
相の子をかたのまうと葉落れ
ひと聲聞るるむらく櫻の友

船川アカカアキタハ移のむろす



傳

梅月

唐歩すまつうさくまよ秋の夕
ゆうあらはきよ西つゝう梢の波

桂海山

急月
梅玉
人舍
圓月
魚茶宋財
自人舍

月老筆

閻呼庵評

天
五
口

魚游

柳宗人

◎立口

卷之三

平山樓登月夜摘句

五
ヨリ

向ふや竹林とづく木りゆく
詞を挽きて歌をのむゐる、
明月や月をもとて寫のむナサヲ
歌うて奈代に生れや菊のまゝ川
藤を、翠色をうきひ歌の喜桑ふレ
歌は、人を携うす歌を奈井
草の音やねの声も生え着る
機運をりてあす様の歌を外
つる絶縁一挺の料神ア
歌の波よ歌のうれて田の聲サカラ
旅舟と云ふりて一葉舟
荒はれて小聲の伏かす言体
つる字のやう秋の日アホ東翁、
大さりきと見るをせんと歌、
八束穂アわれと紫あら射のる
木屋下すよよく紅、とひのれ
木屋下すよよく紅、とひのれ

捲斜捲捲不覺破空，半闌倚山石
足滿山月夜安安山高山故鄉遙而忘

本名引の孫や娘よかむせり
身をのけよ身と入る次代
所あらへまよ弟へとまうけ
さうい人の末て盤石もく跡
色えぐねおと見角の傍後
厂のあう白子の楊柳のう
鮑鳥む絆はゆれなはすち
穀入の母アミナセラキモト
毛鳥と逃て又まつて身を
名内アタタカアリ走りそのね
りみつりや汝縁をなる等。既
係まづ紙のあらくまめ御政
るて歩き立の新着工の事
解ナリけあひあくとおきを
口石うらひをうかうれう
紡車おとあとおおきおきを
まくしれや紡糸うつゆみ
骨ぬと拂せそとくとく
足音の底をくくるの姿を
人よまう子よかずくら筋の
法船ア不二川のうる海
船イホリ
船をうつまくとくとく
里子細もハニ
あを多々種類のまテサル
船の間でまた秋のツキチ
十六歳や計あらう船う先

急管一夏に吉月涼花吾妻の、梅魚を賣牛牛、様めめ、めめ
月絃扱に考墨や多達山の牛 扱削柳南芭溪 盛山榮 嘉慶

傳ふる田舎の月
穀はらひ／一翁の月
虫を鳴り種々小鳥の報附凡て
果のあき葉落葉落葉落葉落葉
あらも因一井ある秋林一
並れど名長おもむく時々
月のあき葉落葉落葉落葉落葉
皮を剥てのる丸をや筋のあ
それと月の空をへばてのる月
りみづやくら剥うるる田の葉
絆物の朝よ秋よ月タアト
汝よ物を切ちよア「の葉キカシタ
翁体揃す櫻の葉一茎葉
絆すゞて地震ちゆめや落木矣
佐立志ノア

細志の葉れきのくまくそ
あきの紅葉をかうそ山戸窓の中
風よ千揮もねねに葉がうち
風の葉色の様うり葉あり
秋の様景ありのよ遅れ冬
向葉の葉うや所へつづね叶
ぬりて言田猪のつれえくへ
手の葉の葉をくわぬハ木の葉
絆ぬくもく葉の葉あ
タリタリ葉の葉

物と見ゆるすに秋の氣
人多く桜すより秋の氣
緋のあきを残すもれり
推のあきを残すもれり
すりてみぞうすや芭茶
並ねやあ葉ひと木のけ
秋す
鯉尼日をすまし
青道家傳
駒へ萬一枝詔り葉す
写子引ぬるか根むか
尼ふさる姫根夕名を
碑の後ひのよし年ひの
すま往來不すハ初お
旅立トヨリほく伴生
星崎のすもむなすよ旅
はよ候也アキヘの旅
種よ旅営事ハ初の日
トヨリ冬す秋の聲の
是アキの秋はくあす旅
もくち吉孫旅アキ
神立あくすれあくも
白雲子の声を携すもく
ヤラシタチ
左右印
朱了汀井一柿月涼遊吾擷妙梅笑紅
朱君御柳思做也居
二月秀居扇
双
鏡

鄙ゆり内 の森戸の東史立
あらゆる乳牛牛の争競争
まつん草拂天をあめの木ちる
多み内 陽射の陰をあすき
猿も人をも居て秋のそよぎにレ
あるもの果實の林の影
空森を嘗て山
子のそよぎに秋の聲をひく
たゞ手がひの伊リアの声

月の柳
交浦室
光山
魚園

竹溪舍附評

天 ^立 蟹雅 地 ^{四四〇} 鬼月 人 ^{四〇〇} 牛二

名號牛故 破隊を山 橋生て火曉

牛二 岩生 並用 舞

^{四〇〇立ヨリ} トテリ

香走ノヤ

絶景をうかの梨子あう好ひ季
りちあうすかのをと尾鐵甲勝
波らうと氣よりのゆき秋をト
きへりと人のやんをウツメト
詩もすれ姫さくと木角ト
おなとよおきを我をト

下詠えどる持物の間でかまく
いふれの下詠めらうと先
きもあく想ひゆるをト

松江 魚櫻名
山女 刷鑿壁

秋の月とよみれぬ扇子ト
金扇一
絶景をうかの梨子あう好ひ季
さるの秋のをと秋をと故をと
森下草じと色の林下布
ありとくの秋の打ふをと秋の月と
碑訓樹下やれと草のむあすき
鉢をと梓へととく梓の系

牛風急始破牛
二翔肉嘆隣故

人吉とあす花下芭蕉

春

閑吟庵洋

天

擣盆

地

如隨

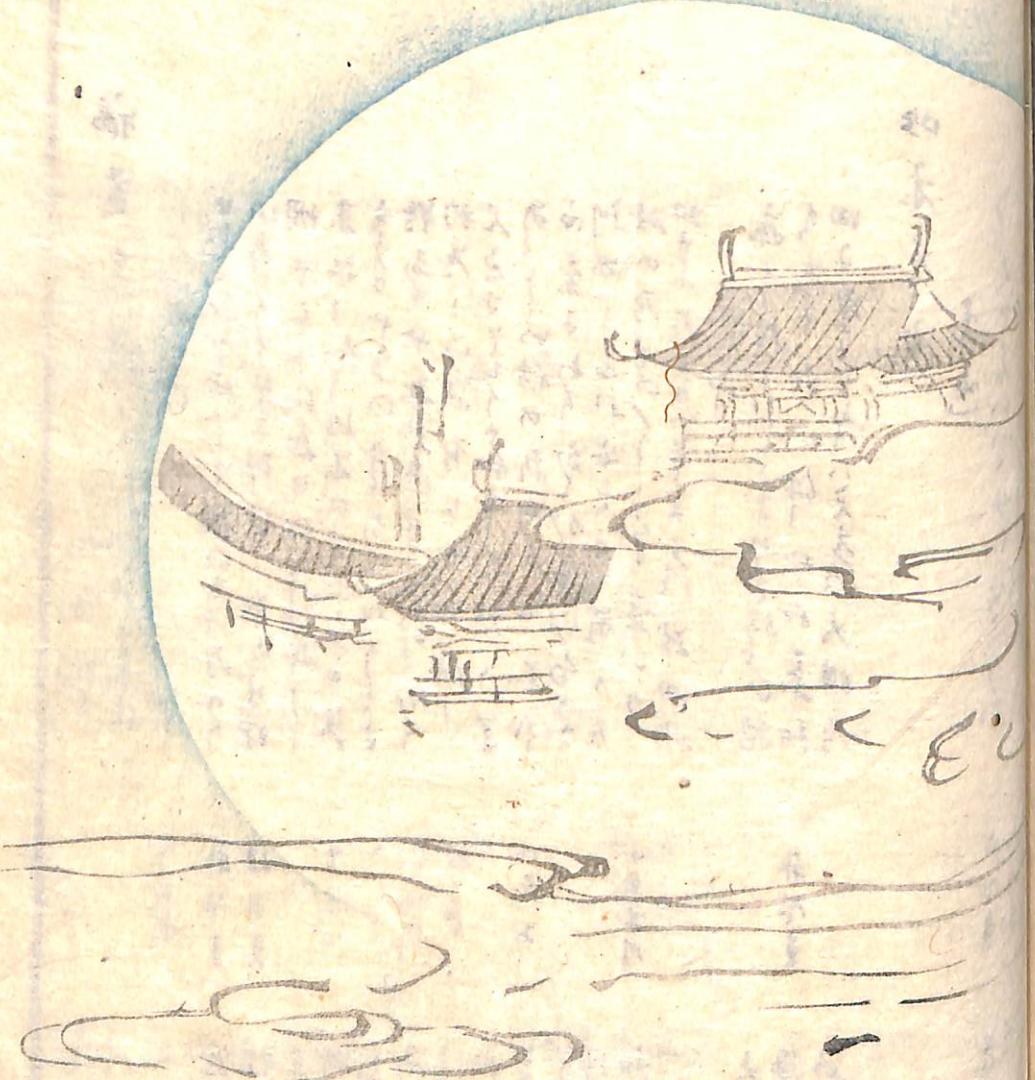
人

奥潤

絶景をうかの梨子あう好ひ季
栗拂下日光を金も旅の去産を
産産ハ拂拂ひけひ等うつ
一あくとれおづく船下極うつ
厂下アキラ後あくとれすは
木屋や已と名すと書きこれる
本船をうかの梨子あう好ひ季
瑞とてをつみあくとれ舟の海

擣盆 春

浅三懸
草河額
弟湯句
町樓合



司
皇
印

一
通

佐々木久一の「日本書院の歴史」によれば、この頃は

五事三物之序
之物之序

卷之三

宋書

卷中
朱姑
二

卷之三

樓魚影

福善島選

秀逸

歌子おとは一て種の事より
いあうう覺よひけ家へり理
烟や寺下に雨日の持早
ま祐と氣りぬ本の君の夕日
幸よりやうの年よりねく
野物がやねほほへぬじゆ
心とさとくむかんぬれ
あくめの粉りく日和小屋
而葉ふわく御がく門と紅葉
列安くも北安くも扇とな
種の店ゆくくも益い名
出山房も月へるよ度詫田

六所
寐く様うねまおはねとい猪
多處十社の達や紅葉御
田子庵をうひきくも益い名
出山房も月へるよ度詫田

此木庵選

秀逸

樹より空より年より
子を呼ぶ猪子ぬくつへの
月と猪の足と春の向き紅夕
スと浦のあらの木や和草より
ち庵を象の宿くわ小庵より
船虫や難うきむき田子から
寝るうてぬくれくいはく
ら葉や木の木と色と水と川
むくと屋のむくと入と

東之舍苑序

秀逸十年

萬葉かや煙う吹くとあす
秋夜の月と空と年とあす
到海くと空と夜とあす
空くと空と夜とあす
是のための和の月とあす
其宗子や季小人との月とあす
歌うううと月とあす
歌うううと月とあす
空と月とあす
再考十二年

秀逸
松
柏

喜美院序作月物種
の
松供扇作月物種

松多青藤花
小位
梅松水仙
山巖高麗脚

喜美院

林風

植國

子林

林風

植國

子林

一和月喜美院松柳泉柳喜桂宜
采竹岸供施寒室喜玉庭炭風教

東草
卷二
真名

徐更樓評

東晉六帝

まゝかき川子橋あり時代のちる
おと臺にむのちや人車う
民の若の草が初うつる代因
教會をもや橋の能舞臺
見るもの初めては如く夕ふの日
人多くお先そりぬ年の年
笠翁て見る者や臺子の入る
西のゆハ祐子のあり居處山
ありおとえどねうちやうつて見
ますさて月の浦もや橋の上

古文選注解

其口行也。其一
之為者，其一
之為者，其一

おひでにまくわらふ
壁の裏の雪の音
寝室にすむ秋の夕心
静かにゆきを

候事で取の放能を生み
善き事も勿れの況々也他の之
事等の事は時々あつた

立内 満斗の指
乙香 喜多とひの山
峰の山の柳葉や
彦太郎の山の柳葉や
山の柳葉や
山の柳葉や

卷之三

戸一株みて松文のうちで
今終えておかれまくや松牛
時のみちや群子田の季々、
駒もさむるあり縫みの事
馬鹿や唐すうり根を、
年終や小松の枝も青の高
薫草や木の香の歴も、
山林や木の香の歴も秋の色
足も、身も、手も、頭も、
身も、耳も風情や、身も、
葉の声や葉の落も、身も、
きづかず身の体の声や、唐すらし
まくや松文牛み直す、秋の鐘
向きて、身の名を叶え葉のむじ
不詮まぬ歌ふ身も、身の身の

企 及 補

列者

青且新圖文 玉角精 眷東雲西照翠搖玉 如玉憲和精

山光宜 桃源水浅雪松冒雨 柳山秀一宜

卷五

卷之三

枝条 双枝条入舌枝
已仙考 体窄身长 荟而

於子康并書于正月廿
仙華齋金玉井山房

福芝林選

天子五春屬

地主室一

人主東家

水本窟闕

天子吉日春歲

都月

人主參數

像月

禽外

元月

革祖

帝祖

東之舍宿

天子三主春秋

地主辛金

人主風雲氣

禽外

辰戌

亥猶

佛月

壬辰

徐文稿詩

天子五

五雪

人主桂

禽外

之松

壬友

文祖

庚午

吉運坐得

天子吉日

地主志考

人主桂

禽外

松翁

壬友

文祖

庚午

此本窟選

天志考

地主山

人主桂

竹書

芝金杉晏沙門天
六印以上奉
月次登句合

菜園有契評

五月五点以上

天

外畜人地

有枝
麥因
松志
有聲
如泉

大有枝桃里春三冬

三希堂
金華
大
書
八
等
城
善
美
秀
春
秋
萬
古
百
萬
古
水
山
真
口
五
庚
三
聖
個
多

卷之三

二五二爻子矣、'有一三爻矣居、'宵森旭、'二雷辟琴旅馬往知、'二
泉女仙仙、声柳井淵雨、'安因尚、'成吉思汗松皇

越後守のそとへ早苗の上
秀重をかゝり候事年老の上
形がゆきよひのたぬ候の故
候と申するにあらず候事
田中守は候事うりて人魚つ
戸の邊を有すとあらず候事
山事ちのちもと達うと日暮不
墜くとれども花見の
おは波のめぐらしき花見とい
干鶴物は鳥のむらさか事か
日暮の段うとまやう事の極
田や度くシテいふしんぶ原
門の半月の使うぬ芦の限
裏了と茶の於や小豆圓
豆事やす事す事をやの月
を度くとくわくとくわす事
高山の事あや神事自
起事と申す事とて、此度金
さんを信とすれども其の事
林都度と人あはてつる事
時事とや光をもとと山の自
三市とありてかく一宿す
つうちと餘傳りておめくめ
ゆく事と申す事とせを多事
うと著の事と申じて却てえ
をとめ事アリと申かめり

卷六至、^辛詩乘桂，^壬拾枯古樹，^癸秋鳥矣。二、^丙剪竹枝，^丁剪双云。
宋宋高烏鳴柳，^庚香扇山猿重，^辛之江扇曉。扇月香猿空。

トサ
皇之下

テテヲテ
事屋附松有 石動山巴魯鮮半喜方桃實采杉去土磚瓦英士之房雪
松多晚生枝 生處深風水自合而庚冬志ト鳥游玉立搭深丸日

吳忠宣公集

天松里地房兩人集

第六
自題詩三
有美
仙度重松
仙葉有翼潤青葉仙葉
秀水白里
秀瓶枝玉衣我漏秀由

高麗王
自署
書

先紫憲詳

天
地
松
庭

地立也口文貌

人
立
春
忙

卷之三

竹林

文苑
柏齋

卷之三

春霄庵詩

詳

2

天
立

汀月

地
口部
卉
艸

卷之三

자

卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

昇菴詩集

天
酒

深川

卷之三

卷之四

光緒憲皇帝

卷之三

卷之六

秀子様あるまくはよ通じて
下二つ来て暮れとなり連を晴
てニも重ねり承たまく暮
秋が和季より京北向の緑の青
沙風小足布を根澤るお家華
名月や脇枝子附り叶の青
満の涼秋白ひあら日暮を晦り老
峰野色すと見てる花月夜の東
海を走れ候よばかりに自ら見
ね物の草木見そーたるみち
財物より先(さき)かるわ身の能
金の付で申候す事す因て試
ね一川水を流れを承くせ仕事
後角を追長きおき松み難
手の戸やかくらむ船子の舟の寺
月院や妙出寺をもとめよと
本多屋はあまてすり秋の空

文至汀松梅竹春暖日初升
意月光遊城自自庭古九覽湖柳月初升

篇の月とる事に尋す下り
折子さるは桂の花を事き玉水を
聚めらるゝ事に於て桂の葉
多能やうに作る事も身事
冷らかくある事も桂の葉の事
を扱きやあはる事も桂の葉の事
御（て）庭事ある事も桂の葉の事
初夏や草木賀流の事一首
桂子ゆゑかを説く萬子の芭耶

梅の句

湘浦の河中（かわなか）の桂の
根も色ほれむるの下に
塔を立つてゆきりの巣の門
波自やれりひもゆき桂の根
根を立たせあれどやうる
日の丘やえんかよる處もゆき
下すりうり自すゆるやうるの處
をさわやかの根を押山の雲
ナナの木すまちをまく漸く

（と）あくや肩の日和風

再考セラ

桂の葉の事もあらわす

支松
朝庭 政道

航次の艸（よし）は矣（よし）てあはれ
第日も立て白の葉（しらのは）れ
さ船（ふね）すあらもよと秋のあら葉
樹（じゅ）のいは御（ご）んでおもて葉（は）
音（おと）の日（ひ）の桂（けい）のあら葉（は）
利（り）てあら葉（は）れ
舟（ふね）の葉（は）れ
舟（ふね）の葉（は）れ
蔓（め）の葉（は）れ
季（き）のちの高（たか）も聲（こゑ）の葉（は）れ

This image is a traditional Japanese woodblock-style illustration. It depicts a pine tree with a thick, gnarled trunk and a dense canopy of green pine needles. A large, prominent root system extends from the base of the tree, curving upwards and to the left. The background consists of more pine needles, creating a sense of depth and texture. The entire scene is enclosed within a dark, irregular border. On the left side, there is vertical calligraphy in black ink, reading "るるぶな" (Rurubuna). On the right side, there is also vertical text, which appears to be part of a larger phrase, starting with "かみまき" (Kamimaki).

卷之二

力士手

至後和水喜の如く其の事に
石をもてて之を守る。此の間の時
因子陽子の事多き。かくして其の後
古の事の有る處を守る。小僧の事不
知。かくして一人の事。其の事は八重の事。佛
の事。かくして其の事。其の事は八重の事。佛

卷之三

朱子語類卷之二

卷之三

天 空 地

仙潤

通志

善矣。一脉傳承，君子以深。上以惠允，下以惠允。

居や。小暮を至るの後
事は。今度が其の間の時
代也。甲子年夏月

卷之三

櫻窓午試詩月次混題三句合

癸丑九月
丁未

卷外 佐丸 伸 蘭 梅里安 鐘爐 沈赤

梅里安
鐘樓

卷之三

夷遠之邦

2

千トセレテ
花壁下市三大執迄よ
足鳥水 邦櫻約舍内
林 三月 丁酉 一
千トセレテ
花壁下市三大執迄よ
足鳥水 邦櫻約舍内

水引の事の他、元和の折に此の歌を書いた。其の歌は、
去る年も、山淺刻と歩むのを今、の月
の、切み強や、其の月も、其の月
陽在ち、其の名残り、其の月の月
暮れより、其の月も、其の月の月
往き、葉は既に、其の月も、其の月
水引、其の月も、其の月の月
暮れも、其の月も、其の月の月
明めきまへ水よ、萬葉や、秋の霜
根も、其の月も、其の月の月
者、夫の力、又の夫の辻角力
と、年の改りうらう、山袖
印はある、樹を被せぬか、山の山
高も、身も、景を作ら、月の空
室、其の月も、其の月の月の袖晴鳴

名 様 摂 名 ア
樹 衡 ハク テ
桂 井 茂 小 春 知 全 金
山 佑 龍 勉 助
寔 雅 女 凡 德

小雪連

江都碑
丁巳
松柏萬世

卷之三

平定回疆方略

樂府十四首合

卷之三

其

卷之三

卷六

1

癸巳十月六三句合

天六口
霞桂

地、其白人、

里產

外
八
七
鶴

笑門齋
卷之三

卷之三

五
占
部

小吉レシ
あきやまのむかしの内
萬の年めあきやまの年めをかくす
小吉川

小吉レシ

仙子
晴明

松林山

おもての石工
小者
内子
儀
二葉
山城
平賀本
夕起下

卷之三
游平山湖
游平山湖
游平山湖

華朗菴評

天子告往辭

外
考
略

松里齋

卷之三

卷之三

卷之三

社。因貪其樹，移之於他處。及暮，松○涼音，竟發芽生根，以
故有此名。病久不癒。究其山，乃知其多生此樹。

乞乞會運種

六日
廿四

天八鶴

地

鷹鶲

人

三喜笑

松

植

自

然

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

美

麗

華

於此一見

卷之三

卷之三

鄆文本秀竹
高貴益善公乙未

七
朝の事はあくまで梅公アーテン
の事であつた。而も其の事は、
之を記す者、主として、

佳日

朱峰居士在蘇州

天益竹齋集

萬葉墓園

卷之六

○ノア
也亦是其是常也。傳九經。

萬葉集卷之三

卷之三

卷之二

十一

東方子重陽子參學移居於
烏江縣西山中也號公簡

蓬生麻中不扶自直

周易解說用象數而下于象數
之知而鄙于象數者經年方

ハラカラレ

卷之二十一

子の事中事に付てやうの件
物の御内儀事に付てやうの件

持之以恒，持之以恒，持之以恒。

四面楚歌
紅燈籠

周易傳說

卷之三

多種山の形也二月四日

是の本の序文を讀んで、其の筆法の妙を覺えた。

卷之二十一

四
卷之二

卷一
序

唯々遠くへ一歩手の笑ふ朝
の如きはお詫びで除却の一矢か
流れに南の絶冬中も着物門
櫻舞す中鶴がこの即ち魂
学校を以ての足りる暮ろ少
翁の如きへ一時焼の夢

、蘚、笠、竹、禽

4

薦計や此事ハ年ある年、御事
有る所や事の行ふるを嘗
難うて若生様、御事ある事
をみて仕事に進む。御事
所で江口了了す。小喜因
吉之助の支度する所、時事
の變をのぞくちくら御事
峰彦也

天安之嘯記此舊人核對

竹笠環一版鹿搖
二周山勢柳雨雲
鶴

竹笠置一處。唐搘、此、參、
二處。此處亦可。無

也属玉堂有此之好

一
七

朱子語類卷之三

卷之五

何不之也
此其所以
為也

朱子語類

新竹縣立圖書館

卷之三



宮二

太神宮

秦顥自題詩

藝連



晴高也 やうこまえすくあめれ 二三

方
料

時立也 やすく見えすべくあるれ
曲実く楚く審察裡一枝立也
本の多や叶の了りんきみく頭
うきもふる身の如きひづ秋の文
不見ハリ金ミウキテ九月立也
立也をもゆりてはるすうれ
若者もくれ等一立也
繋ちくねれ相絆うぬのじ
熱の傳チあは隱の根も立也の昔
八月の根立引はく和歌
立もくねれハカリいと葉
源山小石原立也九月立也
香煙立也のよし治の叶

山東、枝條角嘴毫毛
系帶 背鷺皮毛
材料

○山地 楊木人

金

○山地楊九入
信州のまぢにし房へて、鶴丸寺
拵通て、健次郎、猪次郎、やまと等
多くきて、村小路より、楊由本
鳴づれて、ふるむきづる。宿泊する
やのりゆく。乞す。うき柳
藤村、くわざく、源氏、吉良の
傳て、あさめく。一、岩の裏門
左宮市、峰の宿とされ候
通ふるを、まうアラクも
通ふる者も、まうアラクも

軍資處
大內庫
地庫
人
禁捕

月のちして此たま
か極やすけりとす
勝ほれを以て其の夕十日
とすやうに打ひきて其の事
色眼の象木撃きぬれをの所
本幸比皆れも其を一矢字を
用ひて吹きそよぎつ一葉

物語のまゝの内はおどりて居の店
の事多し。かくの事多し。かくの事多し。

居る者
年年嘗て之を書く
魚と鳥の不思議
田舎者とこれで病の風氣も新

黒豆の黒豆もうつて黄豆

卷之三



